

スト教の歴史を社会・文化・芸術史という観点の下で古代におけるその起源から今世紀まで辿る。

仏語原書から翻訳された『キリスト教神秘思想史』（全3巻 既刊第1巻1996年～）は古代・ビザンツ・ロシア（第1巻）、中世（第2巻）、スペインとフランスを中心とした近代（第3巻）におけるキリスト教の靈性史を主題とし、特に教父時代と中世に関してはキリスト教思想史・文学史の役割をも兼ねている。

本研究所のこの数年にわたって最も中心的な活動になっている『中世思想原典集成』（全20巻 既刊11巻 1992年～）は、教父時代と中世の哲学・神学・神秘思想などの重大な原典を約340の著作の翻訳に簡潔な解説と訳註を付して紹介するものである。本叢書は、翻訳また監修に際して示された、中世哲学会の多くの研究者の寛大なご尽力、ご好意に支えられて始めて可能になったものであり、この場を借りて深く感謝の意を表したい。本叢書に収録されている著作のうち少なからぬものが始めて現代語に翻訳されるものであり、これらの翻訳を通して1500年の思想史の流れの全貌を原典にもとづいて理解することができるようになる。各巻はある時代や学派を完結した形で取り扱い、また各巻になるべく一人の中心的な著者が取り上げられるとともに、各巻の諸著作全体で、テーマに関しても、著者の選択に関しても相互補助的な形でその時代や学派の特徴を表そうとしている。同時に全巻にわたって、いくつかの根本的モチーフ（たとえば創造論、三位一体論、知性論、神秘思想、修道会史など）をその概念史、発展史的流れに沿って研究できる材料が収められている。現在、大きな著作をも収録するいくつかの別巻を企画中である。

なお、中世思想と文化に関する欧文の学術書の翻訳の刊行をも今後積極的に企画する予定であり、上記の諸叢書とともに、この企画に関しても本研究所は中世哲学会の研究者のご提案とご協力を仰ぐ次第である。 (K. リーゼンフーバー)

京大中世哲学研究会——紹介と現状

京大中世哲学研究会は1980年の秋に、当時京都大学文学部で西洋中世哲学史講座を担当されていた山田晶先生の肝いりで、同講座に所属する院生や卒業生の研究発表

の場を確保することを主たる目的として発足した。以来15年余りを経て、会員も120名余りにまで増え、会員や研究発表者の顔ぶれも、「京大」という冠称は所在地を示すに過ぎないといいうるくらいに多様化した。もっとも、発足当初から一貫して、京大文学部に所属する院生やO. D.が、ほとんど自己犠牲的に事務全般を担い続けていることは紛れもない事実である。

研究会の行う事業は「規約」の第3条によると、「(1)研究発表会、講演会等の開催。(2)研究誌『中世哲学研究』VERITASの刊行。(3)国内及び国外の研究資料の蒐集紹介。(以下略)」となっている。発足当初から関わってきた者として振り返ってみて、報告者個人としては、いずれの点についても誠実に努力を重ねてきたし、その都度、望みうる最良の成果を着実に上げてきたと自負している。以下、(1)(2)(3)の順に、過去の活動と成果を、現状を踏まえながら報告していきたい。

(1) 研究発表会、講演会等の開催。

研究発表会に関しては、毎年7回程度、4、5、6、7、9、10、12月の、各最終土曜日の午後で開催することを原則としている（7月と12月は第二か第三土曜日のことが多い）。4月の研究発表会の際に総会を開催する。研究会開催回数は1995年度までで144回を数える。1回（1980年9月）から82回（1991年10月）までは、毎回1名の発表者、以降は毎回2名の発表者を原則としてきた。76回までは原則的に京都大学文学部の演習室で開催したが、以後は京大会館を中心に、京大近辺の施設を会場としている。発足当初は院生の発表（「修士論文作成の中間報告」が含まれる）の割合が半数近くを占めていたが、近年は、年に2名程度、1995年度までで、のべ137人が発表したことになる。

研究発表のテーマは、トマス・アクィナスとアウグスティヌスに関するものが中心であるが、ストア、プロティノス、テルトゥリアヌス、プロクロス、エリウゲナ、アンセルムス、イブン・シーナー、シゲルス、ヘンリクス、エックハルト、ドゥンス・スコトゥス、オッカム、グレゴリオス・パラマス、オレーム、カエタヌス、ルター、ペーメヤスアレスやマルブランシュなども取り上げられてきた。このような幅の広さは本研究会の持ち味の一つであるだろう。また、1人1時間程度の発表時間に対して質疑応答が1時間余り、時には2時間程に及ぶこともある。いきおい密度の濃い、充実したやり取りが続くことが多く、時計を気にしながらの、司会者泣かせの研究発表会となりがちである。

また 1987 年以降 12 月の研究発表は山田晶先生(発足から 1991 年度まで本会の代表者に就任していただいた)が一人で担当して下さっており、テキストの緻密かつ正確な解釈に基づく意欲的・啓発的な発表で、毎年参加者に強い刺激を与えて下さっている。講演会と銘打ったものとしては唯一「山田晶教授京都大学退官記念講演会」(1985 年 3 月 20 日)があるばかりだが、年末恒例のこの研究発表会は、「質問時間」というプレミアのつく講演会でもあり、会員以外の方の参加も多い。〔体力的に〕できる間は発表すると、114 回研究発表会(1995 年 12 月 23 日)の際に山田先生が約束して下さったことは、本当にありがたいことであった。

(2) 研究誌『中世哲学研究』VERITAS の刊行

本会は発足当初から機関誌の発行を企画していたが、何人かの方々の献身的な援助のお蔭もあって、幸運にも発足からわずか 3 年目の 1982 年に『中世哲学研究』を創刊することができ、以来毎年一冊のペースで順調に巻を重ね、1995 年度には 14 号を刊行した。最も大部の 12 号で 164 頁、平均すると 100 頁程度。『中世哲学研究』の構成は、創刊号では論文と「文献紹介」欄からなっており、3 号からは「Notes」の欄が加わり、更に 13 号からは「海外雑誌論文紹介」の欄が新しく登場した。

論文については、前年度の研究発表者が発表内容を発展させたものを中心に、投稿論文もその都度加えつつ毎号 6, 7 編程度を掲載してきた(最少で 4 編, 最多で 12 編)。「Notes」は、3, 4 編の、短めの論文を掲載する欄であるが、内容的には、研究ノートの的なものや、例えば一語にこだわる lexical な研究、あるいは一語一文についての疑問の解明を目指す論考からなる。論文と Note の主題はいうまでもなく、上述の研究発表のテーマのひろがりと同様である。14 号までに掲載した論文と Note の総計は 94 編 + 38 編 = 132 編である。この数は、おおいに評価されていていいと考えている。

「文献紹介」では、毎号 4, 5 編の海外の研究書(原則として単行本)を紹介・批評してきた。必ずしも最新のものに限定せず、価値が失われていないと判断される場合には、1950 年代 60 年代のものでも、積極的に取り上げてきた。今までに紹介した書物のリストの中に 1925 年刊のものが含まれているところに「文献紹介」欄のコンセプトがよく現れていると思われる。13 号までに紹介した文献の総計は 56 編。そのうち、『中世思想研究』の書評で取り上げられた文献と重なるものはごくわずかで、相補的に利用していただければと思う。

さて、本誌の編集に際して目下、最も力を入れて取り組んでいるのが 13 号から始

めた「海外雑誌論文紹介」である。13号に基づいて紹介すると、*Angelicum*, *Archiv für Geschichte der Philosophie*, *Archives D'Histoire Doctrinale et Littéraire du Moyen Âge*, *Augustinian Studies*, *Franciscan Studies*, *Franziskanische Studien*, *Gregorianum*, *ISIS*, *Mediaeval Studies*, *Philosophy*, *Philosophy, Religion and the Spiritual Life*, *Revue Bénédictine*, *Revue de Métaphysique et de Morale*, *Revue des Études Augustiniennes*, *Revue des Sciences Philosophiques et Théologiques*, *Revue Thomiste*, *The Modern Schoolman*, *The Monist*, *The Thomist*, *Theologie und Philosophie* の20誌について、前年度刊行された分の掲載論文のリストをあげ、重要なものについて、200字前後の内容紹介を付すというものである。*Augustinian Studies*, *Franciscan Studies*, *ISIS*, 以外の17誌は京都大学付属図書館にバックナンバーが所蔵されている。編集に携わる者にとっては、かなり骨の折れる作業になるが、今後努力と工夫を重ねて、できるだけ充実させていきたいと考えている。

また、山田晶先生が創刊号以来、毎号例外なく、意欲的な論文を寄稿して下さっていることも報告しておこう。なお、『中世哲学研究』第4号(1985年刊)は、「山田晶先生京都大学退官記念号」であり、先生がご自身でまとめて下さった1985年までの「業績表」を9頁にわたって掲載している。

参考までに最新の『中世哲学研究』14号(140頁)の目次を付しておく。

山田 晶 真理の父—*Soliloq.* I, c. 1, n. 2—

渡部 菊郎 トマスにおける実践的真理と知慮—*ST.* I-II, q. 57, a. 5, ad3—

佐々木 亘 *IMAGO* に後続する類似性—トマス・アクィナスにおける像の完全性に関する類似性について—

加藤 雅人 ガンのヘンリクスにおける〈もの〉の存在構造

Marilyn McCord Adams Common Nature and Instants of Nature—Ockham's Critique of Scotus Reconsidered—

浦 英雄 ロジャー・ベーコンの記号分類—『神学研究概論』第2部第1章—

田口 啓子 *ANIMA* と *CORPUS* の実在的区別について—スアレスからデカルトへ—

Notes

松崎 一平 悲劇のたのしみ—Augustinus, *Confessiones* III, c. ii—

菊地伸二 『未完の創世記注解』における「創造」についての一考察—『マニ教徒を反駁する創世記注解』との比較において—

小原 琢 トマスの神認識における人間の自然本性と神の恩恵—*natura* としての *capax gratiae*—

松根伸治 トマス・アキナスにおける無知と罪

海外雑誌論文紹介

(3) 国内及び国外の研究資料の蒐集紹介

これについては、『中世哲学研究』の「文献紹介」と「海外雑誌論文紹介」の二つの欄がその成果である。

* * *

本研究会は、その性格からして、大学院在學生や O. D. など常勤職に就いていない会員の割合がどうしても多くならざるをえず、その故の利点と困難な点とを持っている。利点としては、定期的かつ頻繁に研究会を開催できるだけの会員の数が確保できていることと、会員たちの多くが研究発表に積極的に取り組まざるを得ない意欲と必要性を備えていることがあげられよう。また、新鮮な発想にあふれた若々しい研究発表・論文も多く、ベテランによる成熟した研究発表・論文と相まって、本研究会の活動がバラエティーに富むものとなりえているのも、このような会員構成のおかげだろう。若い研究者の割合が多いことは、「文献紹介」や「海外雑誌論文紹介」などの企画を積極的に押し進めるべき必要性を生み、それを実行しうるだけの人的資源を確保できるということに結びつく。しかしまた、常勤職に就いていない若手研究者の置かれている状況には、周知のように、極めて厳しいものがあり、彼らの経済的・時間的逼迫が、これらの長所を生かしがたくしていることも事実である。常勤職に就いていない会員を配慮して会費はできるだけ低くせざるを得ないこともあって財政的には常に逼迫しているし、また学生諸君の時間的余裕も徐々に少なくなってきていて、研究発表会の開催と機関誌『中世哲学研究』の編集作業との両方を維持していくことが、ますます困難になりつつある。その一方で、若手会員の研究意欲に応え、それを更に高めていくためには、研究発表会を極力継続し、あわせて『中世哲学研究』を何としても維持し向上させていかなければならない。いまががんばりどころと考えている。

よって、この場をお借りして次のことをお願いしたい。上に報告した活動に興味を

お持ちの方々は、「京大」にこだわられることなく、是非とも入会していただきたい。特に、できるだけ多くの方々に『中世哲学研究』の定期購読（バックナンバーは、いまでも全巻をそろえることが可能）をお願いしたい。いずれも「〒 606-01 京都市左京区吉田本町 京都大学文学部中世哲学研究室 京大中世哲学研究会」宛に連絡されたい。ちなみに、会費は年額 4000 円（学生会員は 3000 円）、定期購読料は 2000 円程度。

（松崎一平）